



愛される仕事、温かい 思いやりが会社を育てる

西松建設 顧問 **西松 好郎**

—まずは、西松建設との関わりについて教えてください。

私は西松建設の前身・西松組の時代から西松家と深い関係にあった石川伝衛の子・石川又郎の長男として1951年に生まれ、又郎の「郎」と西松建設3代目社長・西松三好の「好」の字を合わせて、好郎と名付けられました。ところが私が生後1歳6ヶ月のころに父が工事現場の事故で亡くなってしまい、その後は西松家に引き取られることになりました。といっても最初から西松家に養子に入ったわけではなく、あくまでも石川家の子どもとして育てられることになりました。西松家の養子になって西松姓を名乗るようになったのは、27歳になってからです。

私を引き取ってくれた当時の三好はすでに50代半ばでしたが幼くして父を亡くした私にとっては、本当の父のような存在でした。とても優しくて器の大きい人でしたね。今にして思えば、これは三好流の教育方針だったのかもしれませんが、三好は小河内ダムをはじめ全国各地のダムやトンネルの現場に私を連れ歩いてくれ、そのおかげで私は物心ついたころから工事の様子を見たり、職人さんと話をしたりするのが大好きになりました。大学では土木学科に進学。将来は建設業界で働きたいと漠然と考えていたのですが、私が20歳のときに三好が出張先で急逝(享年72歳)。残念ながら三好に仕事を教わる機会を得ることはできませんでした。その遺志を継ぐべく大学卒業後の1973年に西松建設に入社しました。入社直後は関東支社に配属になり、営団地下鉄有楽町線新富町駅建設工事や新大橋通り新大橋架け替え工事など、主に首都圏の現場を経験させていただきました。その後は本社で土木部長を経験した後、所長として再び現場へ。当時世界最深の地下140mの深さまで連続地中壁を掘った首都圏外郭放水路など、重要な現場をいくつも経験させていただきました。定年を迎えた現在は顧問として西松建設の発展のために、さまざまな活動を行っています。石川家は伝衛の時代から裏方として西松建設を支える役割でしたから、私にもその役割を果たすチャンスが与えられていることを大変うれしく思っています。

—西松三好社長のもとで幼少期を過ごされましたが、三好社長の教えとして心に残っていることはありますか？

何か具体的に教わったことはないのですが、後になって三好が亡くなる直前の1971年の入社式で新入社員に伝えた次の3つの教えを読んだときに、三好が私を各地の現場に連れていって教えようとしていたことがやっと腑に落ちたというか、ものすごくよく理解できました。そして、この教えは今も脈々と受け継がれ、

西松建設を支えていることを実感しています。

①地方の人に親切にすること

わが社は地方に於いてやる仕事が多いためです。(わが社は)私のお爺さんが興し、父が後を継いだのですが、(中略)まず何よりも私は「地方の人に親切にしないといけない。絶対に粗暴な振舞いがあるってならない」ということを強く戒められまして、これが社風となり、今ではこの社風が伝統的な効果を顕わして、これが何よりも地方に於ける仕事の際の協力者ということに相成りました次第であります。

②愛される仕事をする、愛される人になること

建設界に入った以上は人に愛される人になることが、一番大切なことでもあります。人に愛されない仕事をする人は外部と接触するにしても価値のない人です。ですから、皆が仲良く、そして精神的に人に愛される人になるということ(中略)入社式に際し、私の希望といたしまして掲げる次第であります。

③全社員が心を通じ合わせる

当社は全く心の通じた全社員が一丸となっている大家族主義で、本日から心の通じた全社員であるということがいえるのであります。これがわが社の100年を築き上げられた最も根底をなす社風と言っても過言ではないと思っています。

※出典：西松建設社報 1971年5月号

—これからの西松建設への期待をお聞かせください。

現在、西松建設は従来の建設土木事業の枠を超えた総合企業をめざして、大きく舵を切ったところです。新規事業にも次々に参入し、まさに会社全体が大きく進化しつつあります。これ自体は非常に喜ばしいことですし、どんどん前に進んでいきたいと思っはいるのですが、老婆心ながら少し懸念しているのは、社員の気持ちが追い付いているのかどうかということ。というのも、従来の西松は「本業に徹する」ことを良しとしてきた経緯があるからです。「本業に徹すべし」と教育されてきた皆さんの中には、会社の方針転換に上手く順応できていない人、戸惑っている人もいないでしょうか。私は年の功だけはありますし、これまで会社がさまざまな方針転換をする中でいろいろな経験をしてきましたので、今の状況に不安を感じている方の気持ちもよく理解できます。今後は私の持てる知識や経験、情報や人脈をフルに活用して、社員の皆さんが不安なく新たな領域に挑戦できるよう、全力でサポートしていきます。その上で、先ほどご紹介した三好の教えを西松建設の不変のDNAとして若い皆さんにしっかり継承していきたいと思います。皆さん、西松建設は家族のような会社です。これからは皆で力を合わせて「愛される仕事」を成し遂げ、ともに「温かい思いやりのもと」会社を成長させていこうではありませんか。

西松建設とともに90年超 トンネル工事事業拡大に貢献

庄司建設工業有限公司(大分県佐伯市) 代表取締役 **三又 庄司 さん**



—御社と西松建設の関係について教えてください。

1926年(大正15年)に私の祖父にあたる三又長作が出稼ぎ先の朝鮮で西松建設のトンネル工事に従事したのが始まりで、西松建設と当社は100年近くお付き合いさせていただいていることとなります。当社のある大分県では1910年代の日豊本線建設工事を機に「豊後土工(ぶんごどっこ)」と呼ばれるトンネル坑夫集団が生まれ、国内外の工事現場に出稼ぎに行っていました。祖父もその一人でしたが、1930年(昭和5年)には、その仕事ぶりが認められて西松建設の名義人(工長)に任命され、終戦まで主に朝鮮で数々のトンネル工事に従事していたようです。祖父の死後は、私の父である三又福茂が工長を経て大分県佐伯市に三光建設という会社を立ち上げて西松建設の下請け工事に従事、九州各地のトンネルやダム、山陽新幹線のトンネル工事などを担当させていただきました。しかし、私が大学を卒業して入社したころには、諸事情があって会社経営が傾き、三光建設は一時事業停止に追い込まれました。やむなく私も商社に就職してまったく別の仕事をしていたのですが、約2年後に西松建設さんの方から「せっかく良い職人がいるんだから、もう一度やってみないか」とお声がけをいただいてサラリーマンを辞めて大分に戻り、1981年(昭和56年)に庄司建設を設立いたしました。以来40年以上にわたって計130を超えるトンネルやダムの建設工事を受注・施工してまいりました。その多くの元請けが西松建設で、今の当社があるのは西松建設のおかげと言っても過言ではありません。現在も日田1号トンネルや新津久見鉱山トンネルなど大規模な現場で西松建設の皆様とともに工事を進めているところです。

私生活でも三又家と西松建設は家族のような関係でした。私自身、3歳のときに母を亡くした直後、当時「トンネルの神様」と呼ばれていた西松建設の淵野正雄さんのご自宅に引き取られ、しばらく養育していただいたほどです。公私にわたって、大家族主義で義理人情に厚い西松建設に育てていただいたことを今も大変ありがたく思っています。

—西松建設との長い関わりの中で特に印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

西松建設の技術力の高さを実感した現場として鮮明に覚えているのが、九州新幹線の第一紫尾山トンネル工事です。掘り進めていくうちに、突然の異常大出水に見舞われてしまい、大水の水圧でトンネルが潰れるのではないかと大変な状況に直面したのですが、西松建設が独自の工法を駆使して無事に掘り進め、3年がかりで無事に工事を終えることができました。困難な状況でもひるまずあきらめない粘り強さ、そして長い歴史に培われた高い技術力を目の当たりにして、改めて西松建設の強みを

実感した現場として今も強く印象に残っています。

また、会社を立ち上げた当時、九州支店長を務めていた甲斐栄一さんからいただいた「西松建設からの受注だけに頼らず、他の会社にもしっかり営業をかけて実績を積み、経営を安定させなさい」というアドバイスも忘れられません。一見、すごく厳しいアドバイスのように思われるかもしれませんが、これは当社を西松ファミリーの一員として大切に思ってくれているからこそこのアドバイスです。実際、一時的に西松建設からの受注が途絶えたこともありますが、このアドバイスを受けて他社からも受注が得られる体制を整えていたおかげで乗り切ることができました。他社から信用され、受注を得られたのも、当社に「西松建設の名義人」という看板があったからに他なりません。

—「西松人」には、どんな印象を持っていますか？

紳士的な方が多いと思います。創業当時、私はまだ26歳と若かったので、同年代の西松建設の社員の皆さんと毎日泥だらけになって働き、会社の垣根を越えた仲間として付き合ってもらいましたが、皆さん誠実でまじめ、そして仕事熱心でした。一方、所長さんは厳しい方が多かったですね。でも厳しさの中にも、若手をちゃんと育ててやろうという優しさがあって、私も社員の皆さんと一緒に随分と教育していただきました。技術面ではもちろん、経理や見積書の書き方、契約書の書き方など経営の基本もすべて西松の所長さんから学ばせてもらいましたし、今も引き続き学ばせていただいています。祖父が名義人となった時代から建設業界を取り巻く環境は大きく変わりましたが、西松建設の家族主義的で人と人のつながりを大切にする社風は今も脈々と受け継がれていて、それこそが西松建設の最大の魅力であり、安全で着実に工事を進める上での強みだと思っています。

—これからの西松建設に期待することは？

私たち建設会社の最大の財産は「職人」ですが、職人は工事現場での経験を通じてしか、その技術を磨くことができません。西松建設さんには、引き続き一つでも多くの工事を発注いただき、職人が技術を高める場、次世代に技術を継承していく場を与え続けていただきたいと思っています。

西松建設さんは今大きな過渡期にあり、新規事業の拡大などを通じて総合企業をめざす新規ビジョンを打ち出されました。私たちもこれまで西松建設さんとともに培ってきた技術やノウハウを武器に、新たな西松建設の挑戦に貢献していきます。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。